

## 条件節におけるノダの構造と機能

井島 正博

### はじめに

筆者はこれまで、井島（二〇一〇・三、一三・三）でノダ文全体の構造と機能に関して基本的な考え方を示し、個々の表現に関しては、井島（二〇一一・三）で文末ではあるが主節ではないノダ文（ノデハナイ・ノカ・ノダロウ（ノカモシレナイ・ノニチガイナイ・ノカシラ・ノダソウダ）・ノダロウカ・ノデハナイカ・ノダッタ）、および井島（二〇一二・一一）では最も用例の多い主節言い切りのノダ文の類型に関して根本的な原理を示した。

本稿は、これまであえて触れてこなかった条件節中におけるノダ文の構造と機能に関して検討を加えようとするものである。というのも、条件節におけるノダ文には、二つの厄介な構文がある。一つは順接仮定条件節に用いられるノナラであり、もう一つは順接確定条件節に用いられるノダカラであ

る。本稿では、これらの構文を中心に、条件節中に用いられるノダ文を、先に示した観点で統一的に解釈できることを論じようとするものである。

### 1 ノダ順接仮定条件節

典型的な順接仮定条件節はバ・タラ・ナラであるが、ノダの有無が直接関わるのはノナラという形である。ただ、タラもノダッタラ、バもナラ・タラと結びついて、ノナラバ・ノダッタラバという形もないわけではない。

#### 1・1 ノダ順接仮定条件節の先行研究

田野村（一九九〇・一）では、ナラについて、ノナラと置き換え可能な「実情仮定」用法と、置き換え不可能な「状況設定」用法があると論じる。

「実情仮定」のナラについては、「そもそも、「なら」という言い方自体が、ある実情がどうであるかということについての仮定を表現することを中心的な用法とするものである。

つまり、「実のところがくであれは」といった意味を表すわけである。このため、「なら」がそうした意味を表すときには、「なら」と「のなら」は、結果的にほとんど同義の表現になる。」と説明する（例文の番号は本稿の通し番号に統一する。以下同様）。

(1) a そんなに気に（入らないなら／入らないのなら）、よせばいいだろう。

b もし真相を知って（いるなら／いるのなら）、わたしにも教えてほしい。

c もう始めて（いるなら／いるのなら）まだしも、これから言うのでは間に合うわけがない。

d その時現場に（いたならば／いたのならば）、太郎は事件を目撃しているはずだ。

置き換え可能であるのは、後に見るように「実情仮定の「なら」の意味は、状況設定の「なら」とは異なり、「のダ」の性格に矛盾しない。矛盾しないどころか、一致するものである。」からであると論じる。また、置き換え可能ではあるとはいふものの、相違も見出されるという。

(2) a （帰りたいなら／帰りたいのなら）、帰ってもいいよ。  
b 何か言いたいことが（あるなら／あるのなら）、言い

なさい。

すなわち、「のなら」は、帰りたいようにしたり、何かを言いたそうにしたいたりしている相手の様子を受けて発言する場合に特に用いられやすいであろう。むしろ、文脈や状況に基づく見込みのない、いわば白紙の状態での仮定を表現するときに用いられやすいであろう。」という。

また、「実情仮定の「なら」においては、状況設定の「なら」の場合のように、「スルなら」と「シタなら」とが似通った意味を表すということはない。両者は、仮定された事態が過去のこととがらであるかどうかに基づいて明確に使い分けられる。」という。

(3) a （今）空が（曇っているなら／曇っていたなら）、傘を持って行こう。

b 昨夜のうちに雨が（？降るなら／降ったなら）、朝顔も元気になっていいるだろう。」

「状況設定」のナラについては、「ある事態が実現した状況をかりに想定して、その状況のもとでのことがらを表現しているのであって、実のところは現にどうであるかを問題にしているのではない。」と説明する。こちらのナラはノナラに置き換えることはできない。

(4) a 道に（迷ったら／？迷ったのなら）、誰かに尋ねなさい。

b 来月の末までに通知が（来ないなら／？来ないのなら）

ら、それは不採用ということだ。

c 今後一週間雨が「降らなかつたら」／「降らなかつたのなら」、水不足が深刻になる。

d この機会を「逃すならば」／「逃すのならば」、もう死ぬまでハレー彗星は見られない。

状況設定のナラがノナラに置き換えられないことに關しては、「状況設定の「なら」では、仮定されたことがらが現実  
に事実であるかどうかということについての関心は薄い。これは、実情仮定の「なら」が「実のところがくであれば」といった意味を表し、現実との一致・不一致を問題にするのと対照的である。ところで、「のダ」が仮定表現において用いられるときには、背後の事情なり実情がどうであるか、つまり、現実がどうであるかについての仮定を表すことになる。

このことから、「のダ」の表す意味は、実情仮定の「なら」の表す意味に矛盾しないどころか、一致することになるが、事実生についての関心の稀薄な状況設定の「なら」の表す意味とは相容れないものとなる。」という。

また、「状況設定の「なら」が未来の事態を設定するのに用いられるときには、「スルなら」としても「シタなら」としても文の意味はほとんど変化しないことが多い。」という。

(5) a 来月の未までに通知が「来ないなら」／「来なかつたら」、それは不採用ということだ。

b 今後一週間雨が「降らないなら」／「降らなかつたら」、

水不足が深刻になる。

c この機会を「逃すならば」／「逃したならば」、もう死ぬまでハレー彗星は見られない。

この両者の微妙な違いについて、「シタなら」を含む文では、問題の事態がすでに実現した状況の中で話題が展開する。これに対し、「スルなら」を含む文では、ある事態が実現するものであれば、どういふことが言えるのかということが、現在の立場から表現される。」と論じる。

名嶋(二〇〇〇・三)は、三上(一九五一・三)、国広(一九八四・一二)、九二・一〇)などによって提起された、文末ノダ文の規定命題説を承け、まずノダ、そしてノナラの中核的機能を以下のように定義する。

ノダの中核的機能

ノダは「ある状況と主観的に関連づけられた規定命題が現実世界においても真である」という話し手の判断と、「当該既定命題が知的意味レベルにおいて『関連性』を有する」という話し手の判断とを聞き手(客体)化された話し手を含む」に対して明示的に主張する。

ノナラの中核的機能

ノナラは「ある状況と主観的に関連づけられた既定命題を現実世界においても真であるとする」という話し手の想定を帰結節の発話に対する条件として提示する。

この説について、詳しくはまた後に検討する。

藤城・宗意(二〇〇〇・六)では、ナラは歴史的に見ると活用語の準体用法にナラがついたものであり、活用語を名詞化するという点でノナラと同じであり、それによって「前件の事態を既定のものとして認識する」という機能を担うと論じる。そして、(ノ)ナラの特徴を「事態の認識を条件とし、その認識の下での判断を下す」ことが(ノ)ナラの最も基本的な性質であると考ええる。また、ここで言う「判断」とは、前件に示された認識に基づき、話者自身が独自の判断で選り出す結論をすべて含む。これには話者の希望や以来、命令なども含まれる。」と説明し、以下のように意味を規定する。

S1 (ノ)ナラ S2:「S1で表される事態が既定である」と認識した場合は「と条件づけ、S2の判断を行う。

中野(二〇〇五・一二)は、情報のなわばり理論をノダ文に適用し、まずノダの機能を以下のように定義する。

「のだ」の機能—既定化

「のだ」は、命題が話し手の情報領域に既に存在していることがらであると、話し手自身が主観的に見なししていることを明示する。

これをノナラ節に適用して、ノナラの機能を「一つは、ノナラ節の情報が話し手の情報領域に位置づけられることによって生じる「既定化」機能である。そしてもう一つは、ノナラ節の情報を主節で表される判断の条件として主観的に提示

する機能である」と論じる。

そして、ノナラ節とナラ節との違いに関しては、「ノナラ節が提示する情報は、ノダ文の情報と同じく、話し手の主観的判断によって自身の情報領域内に位置づけられたものである。一方、ナラ節の情報は、(中略)話し手の情報領域に属するとは考えにくい。」「ノナラ節では話し手自身の情報領域に既に存在する情報が提示される。ノナラ節の情報は、少なくとも話し手自身は真であると見なしている事柄なのである。」と論じる。

ここには「話し手の情報領域」「既定化」といったいくつかの概念が登場するが、話し手の情報領域に存在することがすなわち既定化であり、既定化されたものは、現実世界においても真であると考えられている。

有田(二〇〇七・五)では「認識的條件文」に用いられる形式として、ナラ・ノナラを挙げている。認識的條件文とは、「前件の言明が既定的であり、かつ、話し手が当該命題の真偽を知らないような条件文」のことであるという。さらにこの前件の既定命題には「狭義に既定的な命題と既定が見込まれる命題がある」という。

さらに、前件が狭義に既定的な場合、その前件を(6)aのように話し手が仮定するときは、(6)bのように「もし」を入れることができ、またバ・タラを用いることもできるが、(6)c・dのように、前件は「状態述語か、動作性述語の状態形を

とらなければならない」。

(6) a 昨日金一封が「出たなら／出たのなら」、明日は買い物に行こう。

b もし昨日金一封が「出たなら／出たのなら」、明日は買い物に行こう。

c 昨日金一封が「\*出れば／\*出たら」、明日は買い物に行こう。

d 昨日金一封が「出ていれば／出ていたら」、明日は買い物に行こう。

他方、前件が狭義に既定的な場合であっても、「前件が談話文脈に所与」であるとき、典型的には、「前件に対話相手によって導入されたことがらが提示されているような場合」には、「もし」を入れることはできず、またバ・タラを用いることもできない。

(7) A: 昨日金一封が出たよ。

B: a 昨日金一封が「出たなら／出たのなら」、明日は買い物に行こう。

b \*もし昨日金一封が「出たなら／出たのなら」、明日は買い物に行こう。

c もし昨日金一封が「\*出れば／\*出たら／\*出ていれば／\*出ていたら」、明日は買い物に行こう。

また、前件が既定が見込まれる命題とは、「スケジュールに組み込まれている事柄など、未来の自体であっても話し手

が現実世界において真（あるいは偽）として成立することを見込んでいるような命題」のことであるという。この場合も、(8) a のように話し手が仮定するときは、(8) b のように「もし」を入れることができるが、(8) c・d のように、バ・タラを用いることはできない。

(8) a 来週の水曜日に出張する「なら／のなら」、今週中に書類を準備しておかなければならない。

b もし来週の水曜日に出張する「なら／のなら」、今週中に書類を準備しておかなければならない。

c 来週の水曜日に「\*出張すれば／\*出張したら」、今週中に書類を準備しておかなければならない。

d 来週の水曜日に「\*出張していれば／\*出張していたら」、今週中に書類を準備しておかなければならない。

(9) a のように、前件が対話相手によって導入された命題である場合には、(9) b のように「もし」も入れることができる。

(9) c・d のようにバ・タラを用いることもできない。

(9) A: 来週の水曜日出張するよ。

B: a 来週の水曜日に出張する「なら／のなら」、今週中に書類を準備しておかなければならないね。

b \*もし来週の水曜日に出張する「なら／のなら」、今週中に書類を準備しておかなければならないね。

c 来週の水曜日に「\*出張すれば／\*出張したら」、今週中に書類を準備しておかなければならないね。

d 来週の水曜日に（＊出張していれば／＊出張していたら）、今週中に書類を準備しておかなければならないね。

## 1・2 話し手の期待か聞き手の期待か

久野（一九七三・六）のナラの規定の(i)・(ii)以来、ナラ節は「聞き手の断定」であると考えられることが多かったが、ノナラも同様の働きを持っているということになる（ここでS1は前件を表わす）。

(i) 話し手は、S1を聞き手（あるいは人一般）の断定として、完全に同意しないまま（すなわち自分自身は、その正否に対する判断を下さずに）提出する。

(ii) S1が聞き手（あるいは人一般）が断定できないような状態を表わしている場合には、非文法的となる。

たとえば、(10) a は自然であるのに対して、(10) b が非文であるのは、話し手自身の気持ちは聞き手に断定することはできないからであると論じられる。

(10) a 次郎が行くつもりなら、太郎もそのつもりでしょう。

b ＊僕が行くつもりなら、太郎もそのつもりでしょう。

名嶋（二〇〇〇・三）の眼目の一つは、それまで久野（一九七三・六）では「聞き手（または人一般）の断定」、蓮沼（一九八五・七）では「他者の意向・主張」というように、

(ノ) ナラ節の内容は聞き手の認識であると論じられてきたものを、ノナラ節の内容は「話し手の想定」であるとひっくり返そうとするところにある。

まず、話し手自身の決心について述べる(11) a の場合は、「話し手自身が『明日ギリシヤまで行こう』と決めた」という状況と「（話し手自身が）明日ギリシヤに向かう」という既定命題とが関連づけられていると考えられる。ここで話し手が「既定命題の現実世界における真」と「関連性の存在」を明示的に主張しようとするれば(11) a が発話されると考えられる。

しかし、その主張を行わず、「既定命題を現実世界においても真であるとする」という話し手の想定を条件として提示し、何らかの帰結を述べる場合もありうる。その場合、(11) a が発話されることになると考えられる。」と論じる。

その上で、聞き手の発話を受ける(11) b の場合も、「話し手は聞き手が「コータムに会いたい」と発話したという状況と関連づけ、「コータムに会いたい」という既定命題を形成したと考えるべきである。先行する発話を受けて既定命題が形成される場合、聞き手の発話と話し手が形成した既定命題の語形・音形とが一致、または、類似することがあり、一見聞き手の主張を受けているかのように見える。」と論じる。

(11) a （とにかくギリシヤまで行こうと決めた後で）明日ギリシヤに向かうのなら、今夜しか会うチャンスはない。

『深夜特急5』

a' 明日ギリシヤに向かうのだ。今夜しか会うチャンスはない。

b 「そのグルン族のコータムに会いたい。どこに住んでいるんだ」

— 中略 —

「会いたいんなら、たぶん、まだこのカトマンドウにいると思いますよ」

『神々の山嶺』夢枕獏

b' 「会いたいんですね。たぶん、まだこのカトマンドウにいますよ」

すなわち、ノナラ節の内容は、聞き手の発話や態度にとどまるものではなく、話し手の決心なども含むのであるから、これらを包括したものでなければならない。そこで聞き手の発話や態度や話し手自身の決心などといった状況と関連づけられた既定命題（＝話し手の判断）がノナラ節の内容なのである、とワンクツション置いた説明をしているのである。

話し手の決心

聞き手の発話  
（話し手の判断）  
既定命題：ノナラ節の内容

状況 関連づけ

このように、「既定命題との関連づけ」といった言い方を

するかしないかは別として、聞き手の発話や態度や話し手の決心や主張も、要は話し手自身が認識した内容なのである、と一括りにする考え方に惹かれるところがないわけではない。要するに、ノナラ節の内容は、「[「…」と聞き手が発話した]と話し手が認識している」あるいは「[「…」と話し手が決心した]と話し手が認識している」のように、共通して最も外側に「話し手が認識している」を持っているものである、と考えることになる。

しかし本当に、ノナラ節の構造をこのように複雑なものと考えなければならぬのだろうか。また、「コータムに会いたい」という聞き手の発話が同内容の、「コータムに会いたい」という既定命題と関係づけられる、という議論には胡散臭さを感じられる。さらに付度するに、ノダ文は話し手の判断を表わすものであって、ノダ文の一用法であるノナラ節の議論に聞き手が現われるのはおかしい、といった先入観も働いているのではないだろうか。

しかるにノダ文の諸用法の中には、聞き手ないし話し手以外の他者の認識をその命題内容にとるものも少なくないように思われる。その代表的なものに否定文と疑問文とがあるが、これらにも発話直前の聞き手の発言を反復する使い方がしばしば見られる（疑問文には、エコー疑問文と呼ばれる用法もある）。ノナラ節の用例の中に発話直前の聞き手の発言を反復するものが多く見られるのも、ノナラ節も同様の用法を持

つことを示唆しているのではないだろうか。

(12) a A 花子と一緒に映画に行くんでしょ。

B 花子と一緒に映画に行くんじゃないよ。

b A 花子と一緒に映画に行くよ。

B え、花子と一緒に映画に行くのか？

c A 花子と一緒に映画に行くよ。

B 花子と一緒に映画に行くんなら、気前のいいところを見せなきゃだめだよ。

(13) a 「いいのよ。私は話したいんだから」と娘は言った。

「それに、あなたの他にそんな話ができる相手もないしね。もしあなたが聞きたくないんなら、もちろんやめるけれど」「話したいのなら話せばいいさ」

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』

b 「もうすこしながい目で見ませんと……。正直に申しあげて、いまのままでは見こみはありません」加能彦次郎ははっきり答えた。「見こみがないのなら、そのようにとりあつかってよい。だめな奴なら、宇野電機の平社員として生涯を全うさせるしかない」

立原正秋『冬の旅』

c 「そうお、貯金はまたできるから、旅行にやってって、いいなさいよ。」「でも、けがするといかんさかい。」「あら、どうして。旅行すると、かぜひいたりけがしたりするんなら、だれもいけないわ。」「壺井栄『二十四の瞳』

d 「加藤さんのことが新聞に出ていますよ」と下宿でいわれると、彼はそっぽを向いた。「加藤さんはえらいんですね」金川義助の妻のしみにいわれたときは、「新聞に出るのが偉いんなら、金川義助の方がおれよりはるかに偉いだろう」といつてかえしたほどだった。

新田次郎『孤高の人』

ノナラの聞き手の発話を受ける用法について、直接直前の聞き手の発話を承けるものから、聞き手の様子・態度からその気持ちを忖度するもの、さらにはもう眼前にはいない相手の心情・行為を受けるものまで幅広く、次第に一般的な他者に対する期待を表わすものに連続していくように思われる。

(14) a A そろそろ帰るよ。

B 帰るのなら、送っていくよ。

b (Aが時計を見て腰を浮かしたのを見て)

帰るのなら、送っていくよ。

c (いつの間にかAの姿が見えないのを知って)

帰るのなら、送っていったのに。

これまで、聞き手の期待、話し手の期待、世間一般の期待など、ノナラ節はさまざまな期待を表わすということを見てきた。ここで何かを仮定する契機にはどのような場合があるかと考えてみると、話し相手の主張を事実であると鵜呑みにしないならば、その内容を仮定することはあるだろう。また話し手がさまざまな事情から、独自の仮定をすることもあ



だろう。さらに世間一般の動向を受けて、そのことを仮定することもあるだろう。要するに、確定条件の場合は、話し手自身がそのことを事実であると信じていなければならぬが、仮定条件の場合は、そのような期待を持っているのは話し手でも、聞き手でも、世間一般でもよいということなのではないだろうか。

### 1・3 「既定性」の有無

ノナラ節には「既定性」がある、ノナラ節は「既定命題」であるとは、しばしば論じられるのであるが、その「既定」の意味は論者によってさまざまであるようである。現実世界で事実であることというものから、話し手が発話以前に入手した情報であるというもので、さまざまに広がりがある。

前者に近いのは、田野村（一九九〇・一）や有田（二〇〇七・五）などであろう。田野村（一九九〇・一）の言う「実情」は、あまり明確ではないが、現実世界の事実のことであろうし、有田（二〇〇七・五）の「既定的」も同様で、「狭義」に既定的とは現実世界で事実であることのようにであるが、実際のナラ・ノナラの用法はそれでは収まらないので、話し手が成立を見込んでいる事態も既定的と呼ばれる。

それに対して、ノダ文の既定命題説を受ける名嶋（二〇〇〇・三）の議論は、三上（一九五三・六）、国広（一九八四

・一二、九二・一〇）が論じるように、後者に近く、話し手が発話以前に入手した情報といった意味で「既定命題」を用いており、それと現実とが関連づけられると論じている。中野（二〇〇五・一二）は、情報のなわばり理論を導入するが、話し手の情報領域に存在することを「既定化」と呼んでおり、これはおよそ話し手が発話以前に入手した情報といった意味で使われているようである（本来の情報のなわばり理論とは若干のずれが見られる）。そして現実世界において真である場合しか、既定化されないと考えているようである。

ここでもう少し見通しをよくするために、「既定性」（あるいはその類義表現）がナラ・ノナラ節の双方を説明するために用いられているか、一方を説明するために用いられているか、という観点で比較してみたい。まず田野村（一九九〇・一）の「実情仮定」はナラ・ノナラ双方が用いられるが、それに対する「状況設定」はナラしか用いることができない。言い換えれば、ノナラは実情仮定のみを用いられ、ナラにはそのような制限はない、ということになる。有田（一九九一・三）は、ナラ・ノナラ節はともに時間的に「特定性」という特徴を持っており、「必ずしも同一の時間空間に含まれている必要はない」と論じる。名嶋（二〇〇〇・三）の「既定命題」は文末ノダ文における既定命題説を受けているので、ノダを含むノナラにのみ適用される。藤城・宗意（二〇〇〇・六）は、ナラも歴史的には準体ナリから生まれており、ノ

ナラが命題を一旦名詞化するのと同じであると論じ、ナラ・ノナラ節はいずれもノダの特徴を受け継ぐものとして、「(ノ)ナラは「前件の事態を既定のものとして認識する」ことを条件とする表現だ」と主張する。中野(二〇〇五・一二)は、ノダを内に含むノナラの機能の一つは、「ノナラ節の情報がかし手の情報領域に位置づけられることによって生じる「既定化」機能である。」とし、それがナラとは異なっていると論じる。有田(二〇〇七・五)は、多くの研究が形態からその意味・用法を究明するのは逆に、「前件の言明が既定的であり、かつ、話し手が当該命題の真偽を知らないような条件文」である「認識的条件文」を担う代表的な形態として、ナラ・ノナラが挙げられている。したがって、認識的条件文は、ナラ・ノナラ以外の形態も用いることができ、逆にナラ・ノナラには認識的条件文以外の用法がある可能性も開かれている。以上を表示するとおおよそ以下ようになる。

	ナラ	ノナラ	表現
田野村(一九九〇・二)	△	○	実情
有田(一九九一・三)	○	○	特定性
名嶋(二〇〇〇・三)	×	○	既定命題
藤城・宗意(二〇〇〇・六)	○	○	既定
中野(二〇〇五・一二)	×	○	既定化
有田(二〇〇七・五)	△	△	既定的

これだけを見ても、既定性という概念が論者によってまったく異なった概念規定が行われていることがわかる。

そもそも、ノナラに関する議論で、「既定性」が問題にされるのはどのような経緯なのだろうか。それは一方では、文末ノダ文の意味・機能に関する議論の中に、既定命題説というものもあり、これは、文法的には、ノによって命題を名詞化するという段階があるが、これは意味・機能的には、その命題を既定のものとするものであると解釈されると考えるものである。その考え方をノナラにも適用すると、ノナラにも命題を既定のものとする働きがあると考えることになる。他方ではそのような理論的な要請ではなく、ノナラ節の記述的な観察から、ノナラ節には何らかの「既定的」な内容がくると直感的に断じた場合もあるだろう。

ただ、ノナラ節で特に「既定性」が問題になるのは、これが仮定条件節であるからなのではないだろうか。「既定的」な内容が仮定条件として用いられるということは、表面的には明らかな矛盾を含んでいる。「既定的」な内容であっても仮定条件として用いられると言われる背後には、どのような事情を想定すればよいだろうか。

「既定性」という特徴は、文末ノダ文にも共通するものであった。確かに文末ノダ文の場合は、話し手の信念を表わすものであり、〈意志〉〈命令〉用法などを除けば、おおよそ現実世界で事実である内容であると言えることもできる。しかるに、

それをそのままノナラ節に適用してノナラ節が「既定性」を持つと考えると、仮定条件として用いられることと齟齬を生じることになる。それならば、ノナラ節は話し手や聞き手、世間一般など、何らかの人物の認識内容を表わすというように、見方を変えてやればどうだろうか。むしろ、ノナラ節の本質的な働きは何らかの人物の認識内容を表わすことであつて、認識は多く外界を知覚することから生ずるために、二次的に現実世界の事実を表わす、すなわち「既定的」であるように見えるということではないだろうか。

しばしば「そんな」「そう」「あれだけ」など現実の状況を受ける指示語が用いられるのも、そのような経緯を表わしているのだろう。

- (15) a そんな力があるのなら、管理人をしめあげてマスター・キイを手に入れればいいのだ。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』

- b そんなに欲しかったのなら、そう言えばよいのに。私は、おもちゃ屋の店先で笑いましたよ。

太宰治『人間失格』

- c 「あんたがそう言うのなら、一つ骨を折ってみようじゃないませんか。自分が帰ると言つたのでは、おっかさんはとても承知してくれないが、追い返されたのなら、あきらめてくれるだろうと思つて、彼はなんの弁解もしなかつた。

山本有三『路傍の石』

- d あんなに、からだが弱いのに、あれだけ勇ましく戦うのなら、からだが丈夫だったら、もつと手がらを立てるに相違ない。

山本有三『路傍の石』

ところで、蓮沼(二〇一一・三)などには、ナラ・ノナラ節には、ノダカラ節と同様に、「どうせ」「せつかく」といった副詞が共起すると指摘される。実際、以下のように「どうせ」「せつかく」と共起した例を探すことができる。

- (16) a 「おら、思うんだが」さぶの声はみじめに弱々わしかつた、「どうせゆく先に望みがねえんなら、いつそいまのうちに、職を変えるほうがいいんじゃないやねえだろうか」

山本周五郎『さぶ』

- b 「そんならどうすりやあいんだ」とべつの男がきき返した、「ここにいたつて溺れ死ぬばかりじゃねえか、どうせ死ぬんなら」

山本周五郎『さぶ』

- c 「譲治さん、あたし喉が渇いたから、何か飲む物を云つて頂戴。浜さん、あんた何がいい？ レモン・スクオツシユ？」「え、僕は何でも結構だけれど、……」「まあちゃん、あんたは？」「どうせ御馳走になるのなら、ويسスキー・タンサンに願いたいね」

谷崎潤一郎『痴人の愛』

- d 懸命にオマツがそう励まし、持つてきた干し芋を口に入れてやろうとしますと、モキチは首をふりました。どうせ死ぬのなら一刻も早くこの苦しみから逃たいと思つ

たのでしよう。

遠藤周作『沈黙』

e あゝの火災の折、何もかもが焼失した中に、このピアノだけはどうした奇蹟か書生たちによつて二階から運び出されたのだ。しかし、どうせ運びだすのなら、何よりも先に、もっと手輕に、いやたとえ生命をかけても、珊瑚の間の御眞影を持ちださねばならなかったはずだ。

北杜夫『楡家の人々』

(17)

a 「……おれなどは早くから江戸へ出て、いろいろな目に会つて来てもいるし、何が起ろうと平氣だが、せがれは図体が大きくとも世の裏表を知らぬ。ま、せつかく剣を把つて世に出ようというのなら、と、おれも陰へまわつていささはたらいてやつてもいるけれど、それだけに變な事件に巻きこまれては困る」池波正太郎『劍客商売』

b 「はしかでも、疱瘡でも、やる時期つていうものがあるわよ。四十になつて浪人したつて、もう青春の挫折でもないもんね。せつかく学生をやるんなら、浪人もした方がいいわよ」  
曾野綾子『太郎物語』

c 「そうだな。折角そう言つてくれるんなら、ほしいものがあるんだ。このごろ活け花をしたくても、花が高くてな。丁度今ごろ金閣はあやめやかきつばたが花ざかりだろう。かきつばたを四五本、薔のやら咲きかけのやらもう咲いたのやら、それに木賊を六七本とつて来てくれないかな。今夜でもいいんだ。夜、俺の下宿へもつて来

てくれないかな」

三島由紀夫『金閣寺』

このことは何を意味しているのだろうか。「どうせ」「せつかく」にもそれぞれ研究があるが、ここではおおよそ「どうせ」は紆余曲折(後件)はあつても最終的には同じ結果・結論(前件)にたどり着くこと(主節に用いられる場合もほぼ同意)、「せつかく」は価値のある行為・状態(前件)を受けてそれを生かした結果(後件)を導こうとすること(逆接の場合は、導かれなかったこと)を表わすというように了解しておく。

「どうせ」は条件節が結果・結論、主節が原因・理由、「せつかく」は条件節が原因・理由、主節が結果・結論というように逆転している点は興味深いが、いずれも話し手が当該の事態に対して何らかの評価を下しているという点においては共通している。

この特徴は、ノナラに限るものではなく、ナラにも共通するものであり、ナラは、有田(一九九一・三)が論じるように、前件と後件とは「必ずしも同じ時空に含まれている必要はない」ものであり、それを「話者の判断」で結びつけたものである、という認識と深く関わっているだろう。これはまた、中野(二〇〇五・一二)がスウィーツァー(一九九〇)の議論を援用して議論しているように、言語の三階層すなわち、内容領域(content domain)、認識領域(epistemic domain)、言語行為領域(speech-act domain)のうち、ナラ節が、認識領域、あるいは言語行為領域で働く、所与条件文(given

condition)であるからであるということになるのかもしれない。条件文についての考察は再考を期したい。

## 2 ノダ順接確定条件節

### 2・1 ノダ順接確定条件節の先行研究

ノダカラの振舞いが特殊であることは、田野村(一九九〇・一)、野田(一九九五・五、九七・一〇)、桑原(二〇〇三・四)、名嶋(二〇〇三・一二)などに指摘されているが、その説明は必ずしも容易ではない。そこでまず先行研究に記述されているノダカラの特徴をまとめてみたい。ただ、「のだから」の文の文末は単なる事実の述べたてでは不自然であり、判断や命令・依頼、意志などに限られるという文末制限がある(野田(一九九五・五))といった主節の制約は、ノダと比較したカラの特徴として、永野(一九五二・二)以来指摘されていることであり、ノダカラの特徴というわけではない。したがってここでは採り上げない。代表的な特徴をまとめると、以下の二点に集約されるようである。

第一に、ノダカラ節は聞き手がすでに知っている内容である、ということ。

田野村(一九九〇・一)では、「PのだからQ」の前件Pは、疑念の余地なく定まったものとして提示されるというこ

とから、聞き手がすでに知っていることがらであることが多い」として以下の例を挙げる。

(18) a せっかくここまで(？来ましたから／来たんですから)、見て行こうか。

b (？女性だから／女性なんだから) 女性にしかできないおしやれを楽しみましょう。

c もう(？小学生だから／小学生なんだから)、それくらいのこととは自分でしなさい。

d あなたなりに(？努力したから／努力したんだから)、そう言えは？

e 君がそう(？言うから／言うんだから)、間違いはあるまい。

他方、「聞き手の知らないことがらPをまず伝え、そのうえでQを述べるという場合には」ノダカラは以下のようにふさわしくないという。

(19) a わたしもしたくが(？できましたから／？できたんですから)、行きましようか。

b あすは早朝会議が(？あるから／？あるんだから)、早めに来てくれ。

c 今までにもやったことが(？ありますから／？あるんですから)、大丈夫です。

d あの子ももう(？高校受験だから／？高校受験なんだから)、今は試験勉強で大変です。

ただし、田野村（一九九〇・一）はそれにすぐ続けて「もつとも、「PのだからQ」のPが、聞き手にとって未知のこととがらであり得ないわけではない」と付け加える。

野田（一九九五・五）でも、「のだから」の文では前件の事態は相手が知っていることに限られているようだ」と指摘する。

(20) a 「春キャンのサンプルが届いたから、事業の方でチェック頼むよ」  
『東京ラブストーリー』

b ?? 「春キャンのサンプルが届いたんだから、事業の方でチェック頼むよ」

さらに、「が」と「のだが」では、「のだが」のほうがいくぶん自然である。」と論じる。

(21) a 長嶋茂雄さんに聞いたのだが、キューバの野球には面白い特徴があるそうだ。  
『龍言飛語』

b ? 長嶋茂雄さんに聞いたが、キューバの野球には面白い特徴があるそうだ。

「また、前件の事態を相手も知っている場合は「のだから」のほうが自然のようである。」

(22) a 「そこまで話したんだから、私も最後まで聞くわ」  
『葡萄と郷愁』

b ?? 「そこまで話したから、私も最後まで聞くわ」

「一方、「が」と「のだが」では、「が」が自然で「のだが」は不自然である。」

(23) a 先生は歌は一気呵成みたいな感じで作ると書いておられました。が、あれは本当ですか。  
『魔法の杖』

b ?? 先生は歌は一気呵成みたいな感じで作ると書いておられたんですが、あれは本当ですか。

これらをまとめると以下のような表になるのだが、これを見るといういかにも見事に対称的であるように見える。

相手は前件の事態を知らない	??のだから	のだが
相手も前件の事態を知っている	のだから	が
??から	??のだが	が

ただ、これを文末ノダ文の振舞いと比較すると、文末ノダ文と平行するのはノダガ節であり、ノダカラのほうが特殊であることが明らかとなる。

とはいっても、ノダカラもきれいにこの表に収まるわけではないことも付け加えられている。たとえば「あなたは知らないと思うけど」と明示されているように、相手は前件の事態を知らないのに、「のだから」が用いられうる。ただし、この文が適格となるのは、相手が前件の事態を知っているべき立場である場合に限られるようである。」と指摘する。

(24) 「あなたは知らないと思うけど、先生は身体が弱いんだ

から、無理させちゃいけないよ」

また、(25)のように「独話で「のだから」が用いられる場合は、話し手自身、前件の事態を既に知ってはいるが、改めて自分自身に十分認識させようとしている。」と論じる。

(25) マックイーンの馬券を買った人の中には、「武豊が乗って、あんなったのだから仕方がない」という開き直りにも似た諦めもあったようだ。『AERA』1991.11.12

以上のように、ノダカラ節は話し手がすでに知っている内容である、という特徴には、どうやら例外も多そうであるが、そうは言ってもそのような傾向が見られるということに對しては、何らかの説明を与えなければならぬ。

第二に、ノダカラ文には非難や説得のニュアンスが伴う。

ここで、「非難」と「説得」とを並べたが、一見まったく異なった働きのようにでいて、共通性があるのは先行研究を見ていけば明らかとなる。

野田（一九九五・五）には、以下のようにノダカラには非難のニュアンスが生じるという指摘がある。

(26) 「私は『人事課』で忙しいんだから、仕事はさっさと片付けてよ」  
『無印〇〇物語』

「話し手は、「私（話し手）は人事課で忙しい」という前件の事態を、相手も知っているはずだとみなしている。そして、前件の事態を知っていれば、「（相手は）仕事をさっさと片付けるべきだ」といった後件の判断が必然的に導き出され

るはずだと考えている。しかし、実際は、相手は前件の事態を知っているにも関わらず、後件で示される行動を実行していない。つまり話し手と同じ判断に至っていない。そこで、話し手は前件の事態を相手に十分認識させることによって、後件の判断が必然的なものであることを示し、その判断に至っていない相手を非難している。」と論じる。

他方、桑原（二〇〇三・四）は、ノダカラには説得の働きがあると述べる。たとえば(27)が「知らない人ばかりのところへ行く」ことがこれまでの会話とどのように関係しているのかが明確でない「ために不自然であるという了解から、「から」は後件の原因、理由としての前件を示すことしかできないが、一方、「のだから」はいつも聞き手を説得するための理由であるので、聞き手との対立点が自明になる」と論じる。

(27)（今朝、ブラジルに支店長として赴任する商社員夫婦。幼馴染みが結婚し、子供もいないので夫はいまだに妻をクミちゃんと呼んでいる）

「ねえ、恭ちゃん。今さら変だけど、私のこと、クミコって呼んでよ。これからそうしてよ」

「照れるよ。そんなの」

a 「どうせ知らない人ばかりのところへ行くんだから、そうしてよ。ね、そうしよう」

浅田次郎『角管にて』

b \* どうせ知らない人ばかりのところへ行くから、そうしてよ。ね、そうしよう。

以上のような議論から、最終的に以下のような結論を導く。

1. 「のだから」は話し手と聞き手に対立する点があつて、説得する時に用いる。

2. 話し手はその対立を説得して同意させる最も効果的な理由を「のだから」で示す。

3. 「のだから」で示される理由は、確かな事実として提示される。

4. 聞き手を説得して話し手と同じ立場、判断に変えよう、という意図があるので、ある種の強引さがつきまとう。このため、「のだから」で説得する相手・場面には制限がある。

## 2・2 ノダ順接確定条件節の非難・説得のニュアンス

前節では、ノダカラ順接確定条件節には大きな特徴として、聞き手の知っている内容であること、非難・説得のニュアンスがあることの二つが先行研究で指摘されているのを見た。ここではそのうち後者について理論的な検討を試みたい。

ノダカラ節の特殊性は、言うまでもなく、ノダの特徴とカラの特徴が組み合わさったところから生ずると考えることができる。ここで、ノダカラというひとまとまりの形で独特の

意味を担うようになった、という可能性も否定はできないが、そのように考える前にまず分析的に説明ができないかどうか検討すべきであろう。さて、まず①ノダの特徴としては、ノダ節は発話時の話し手の信念を表わすが、さらにそれと、発話時直前の話し手の期待や聞き手の期待との間にギャップがあることを表わす。次に②カラの特徴としては、主節に〈命令〉〈意志〉〈評価〉などの表現が来ることはよく知られている。さらに③カラは順接確定表現であることから、因果関係を表わすことになる。以上を組み合わせると考えると、ノダカラ文は以下のような構造であると考えられる。

ここで、井島(二〇一二・一一)で示した、文末ノダ文に

関する議論を導入したい。まず、文末ノダ文におけるノダの働きは、主節が「(発話時における)話し手の信念」であることを明示することであると考えられた。しかるに、文末にノダを伴わない言い切り文であっても、主節が(発話時における)話し手の信念を表わしていると言うことができる。

(28) a 雨が降っている。

b 雨が降っているんだ。

それならば、あえて文末ノダ文を用いる理由はどこにあるのだろうか。それは発話時直前までの話し手自身の期待と発話時における話し手の信念との間、あるいは聞き手の期待と話し手の信念との間にギャップがあることを明示するためであると考えられる。たとえば(29) a では、話し手自身が発話の



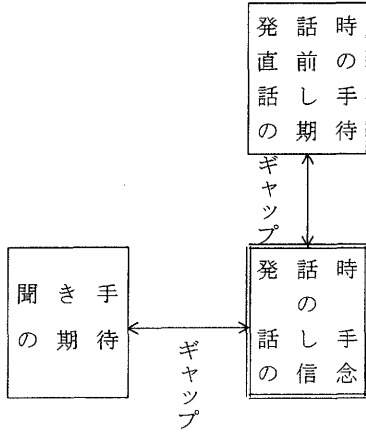
直前まで雨が降っていることを知らずにいて、発話時にそのことに気が付いた場合であるし、(29) bは、家に居て雨が降っていることを知らない母親に対して、雨が降っていることを知らせる場合である。

(29) a (急に涼しい風が吹いてきたので外を見て)

雨が降っているんだ。

b 母… どうして傘なんか持って行くの？

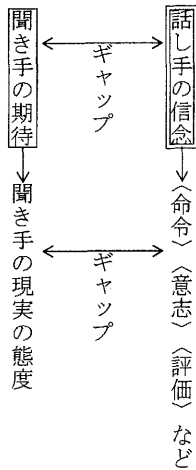
息子… 雨が降っているんだ。



同様の原理がノダカラ節にも働いていると考えることはできないうか。

まず、ノダ節によって話し手の信念が提示される(①)が、これは主節で示される(命令)(意志)(評価)など(②)の

理由としてである(③)。ただ、ノダカラ順接仮定条件文を用いるのは、話し手の(命令)(意志)(評価)などに反するような聞き手の現実の態度に触発されたからであり、そこから逆算して話し手の信念と対立する聞き手の期待が予想されるからである(①)。そしてしばしば、話し手と同じ信念を聞き手も持っており、それから話し手の(命令)(意志)(評価)などと同内容の聞き手のあるべき態度が導かれることを含意する。以上を図示すると以下のようなになる。



(30) あなたが犬を飼いたいと言ったんだから、ちゃんと世話しなさい。

ここで、「あなた(子供)が犬を飼いたいと言った」という話し手の信念を理由にして、「ちゃんと世話しなさい」と命令を下している。これは、子供が犬の世話をきちんとしないという現実の態度から逆算される、あたかもその子は犬を飼いたいなんて言わなかったかのような状況と対立する。

これは、一部に聞き手の期待に話し手の信念が対立する構

造を持っており、この部分に注目すれば、聞き手に対する「非難」の表現となる。一方、聞き手の現実の態度に話し手の「命令」(意志)「評価」などが対立する構造も持っており、この部分に注目すれば、聞き手に対する「説得」の表現となる。

## 2・3 ノダ順接確定条件節は聞き手の知っている内容であること

ノダ確定条件節が多くの場合聞き手の知っている内容であることは、事実としてはもはや周知のことと思われるが、どうしてノダ確定条件節のみにそのような特徴があるのか、理論的に説明することは難しい。ここではそれに対する可能な限りの説明を試みたい。

ここで、吉田(一九八八・三a、b)で提示された、ノダ文の類型を想起したい。「聞き手に伝える」(吉田(二〇〇〇・三)で言う「第三類」)に分類されたものには《告白》《教示》《強調》(後に「第四類」に分類された《決意》《命令》は除く)があり、「話し手が受け止める」(後の「第二類」)に分類されたものには《発見》《再認識》《確認》がある。これらは、井島(二〇一一・一一)で論じたように、「発話時の話し手の信念」に対する「発話時直前の話し手の期待」もしくは「聞き手の期待」との間のギャップを表わす表現であ

ると了解される。ここで注目したいのが、「話し手が受け止める」の方には《再認識》という用法があるのに、「聞き手に伝える」の方にはそれに対応する、聞き手の《再認識誘発》用法というものが無いことである。理論的には、話し手と聞き手とのギャップを表わす表現の中には、聞き手の《再認識誘発》用法というものもあつてしかるべきである。

実際、吉田(一九八八・三a、b)で示された《再認識》の用例(31a)に対して、(31b)のように《再認識誘発》の用例を作ろうとしても非文になってしまう(勿論、単なる《教示》の意味合いでは用いることができる)。ここで求める意味合いは(31b')のように《確認》のダロウなどを用いて表現することができる。

(31) a しまった！銀将は真横へは進めないんだ。《再認識》  
b #おい。銀将は真横へは進めないんだ。《再認識誘発》  
b' おい。銀将は真横へは進めないだろ。

ここでは逆に、文末においては《再認識誘発》用法は《確認》のダロウなどによって担われているために、文末ノダ文にはこの用法が成立しなかったのだと考えたい。

とするならば、まず第一に、《確認》のダロウは文末にしか用いられないので、条件節においては、《再認識誘発》用法を妨げる要因はないことになる。また第二に、順接確定条件文はしばしば、聞き手が知っているはずであるがあたかもその場ではそのことを失念しているかのような振舞いに対し

て、そのことに対する再認識を求め、それを正すことを求めるような場合に用いられると考えられる。それに対して、逆接確定条件文は、『再認識誘発』を前件とするような用法は考えにくい。

ちなみに、田野村（一九九〇・一）、野田（一九九七・一〇）、名嶋（二〇〇三・一二）などにおいて、「のだから」が「のだ。だから」と置き換えることができるかどうかについて議論されている。田野村（一九九〇・一）では、(32) aは「一方では、時間がないことを告げたいので、急ぐことを要請しているものとも取れるが、他方では、時間がないことを十分な根拠として、急ぐことを聞き手に強く要求しているもの取ることも可能」であるのに対して、(32) bは「時間がないことを十分な根拠として急ぐことを強く要求しているとする、第二の解釈しかできない」と論じている。

(32) a 時間がないんだ。（だから） 急いでくれ。

b 時間がないんだから急いでくれ。

ここで、(32) aの第一の解釈は『告白』ないし『教示』であるが、第二の解釈は少なくとも聞き手が本来そのことを知っているはずであることを含意する『再認識誘発』用法ではないのだろう。それに対して、(32) bは『再認識誘発』用法であると了解される。

また、野田（一九九七・一〇）では、「のだから」とかなり接近している「のだ」の文」として、(33) a・bのような例

を挙げる。

(33) 「ねえ、月給は上がるのかしら？」

a 「さあ。何しろ倒産しかかっているんだ。無理じゃないかな」

赤川次郎『女社長に乾杯！』

b 「さあ。何しろ倒産しかかっているんだから、無理じゃないかな」

ただし、これらについては「後続の文に従属した特殊なものだと考えたい」として、それ以上の考察はなされていない。これも(33) aは『教示』と解釈されるが、(33) bは『教示』とも『再認識誘発』とも解釈されるためであると了解できる。

名嶋（二〇〇三・一二）では、「のだから」を「のだ。だから」に置き換えるテストを試みて、「置き換えられるものと、置き換える意味が変わるもの、置き換えると許容度が低下するものが存在する」ことがわかったとして、置き換えられない三つの類型を示す。

第一に、「一般的に、ノダは「聞き手が認識していないことを教えよう、知らせようという話し手の聞き手に対する心的態度」（野田（一九九七・一〇））であることを前提に、(34) a・bのように前件が「送り手よりも受け手側に属する判断」である場合だという。

(34) a 「あなたはいいわね。自分の好きな仕事だけしてらるんだから」

b ?あなたは自分の好きな仕事だけしてられるんだ。だから

らいいわよね。

この議論は、まずノダの働きが「聞き手に伝える」(第三類)という機能に限定されているという認識が誤っている。

そして、(34) a のノダカラにおいては、倒置表現ではあるものの《再認識誘発》と充分に解釈できるが、(34) b の文末のノダでは《再認識誘発》と解釈できない(《確認》表現という解釈は可能であるが、その場合「だから」ではなく「(それ)なら」とあるべき)。

第二に、前件と後件との間に因果関係が認めにくい場合であるという。

(35) a エリそつちこそしらばつくれな<sup>い</sup>でよ、ちゃんと知<sup>つ</sup>てるんだから。

b ちゃんと知<sup>つ</sup>てるんだ。だからそつちこそしらばつくれ<sup>な</sup>いでよ。

(35) a に関して、「送り手が「しらばつくれな<sup>い</sup>でよ」と発話した理由は「送り手が知らないと思<sup>つ</sup>て受け手がしらを切<sup>つ</sup>ているから」であつて「送り手がちゃんと知<sup>つ</sup>ているから」ではない。」このように因果関係が認めにくい場合は、同じ意味で(35) b のように「のだ。だから」で言い換えることはできないという。しかしこの例もあたかも話し手がそのことを知らないかのような聞き手の態度(しらを切る)に対する《再認識誘発》の例であり、文末ノダ文では表わすことができない。

第三に、複数の解釈が可能な場合であるという。

(36) a 博<sup>もめごと</sup>は後からしてくれよ、俺は疲れて帰<sup>つ</sup>て来てんだから。

b 俺は疲れて帰<sup>つ</sup>て来てんだ。だからもめごとは後からしてくれよ。

これは「疲れて帰<sup>つ</sup>て来てんだから(休ませてくれ)」(後件省略)、「疲れて帰<sup>つ</sup>て来てんだからもめごとは後からしてくれよ」(倒置)、「疲れて帰<sup>つ</sup>て来てんだ。」(言いさし)、「疲れて帰<sup>つ</sup>て来てんだから、もう(不満感情)」(終助詞的用法)の複数の解釈が可能である。」ことが「のだ。だから」と同じ意味では言い換えられない理由であるという。しかしこれも、あたかも話し手が疲れて帰<sup>つ</sup>て来て<sup>い</sup>ることを知らないかのような聞き手の態度(もめごと)に対する《再認識誘発》を表わしていると了解できる。

これまで、ノダカラ節が聞き手も知<sup>つ</sup>ている内容である場合について検討を加えてきたわけであるが、実際には、ノダカラ節は地の文にも多く用いられており、《再認識誘発》以外の用法の用例も多く見出される。

(37) a 駒子はいつも行男の話を避けたがる。いいな<sup>い</sup>ずけ<sup>で</sup>はなかつたにしても、彼の療養費を稼ぐために、ここで芸者にでたというのだから、「真面目なこと」だったにち<sup>が</sup>いない。

b 「だが……」父はやがて何か用事でも思<sup>つ</sup>いたよう

川端康成『雪国』

に、立ち上がりながら、「もうこの位に良くなっているのだから、夏中だけでも行っていたら、よかりそうなのだがね」といかにも不審そうに言つて、病室を出て行った。

堀辰雄「風立ちぬ」

c 「ここはどうもあれの身体には向かないのではないだろうか？もう半年以上にもなるのだから、もうすこし良くなつていそうなのだが……」 堀辰雄「風立ちぬ」

d 「赦すも赦さないもありませんよ。君はナオミに欺されていたので、僕とナオミの間柄を知らなかったと云うのだから、ちつとも罪はない訳です。もう何とも思つてやしません」 谷崎潤一郎『痴人の愛』

おわりに

今回は、統一的な解釈が困難であつた、ノナラ節、ノダカラ節について分析を試みた。どのように考えればよいのか、最後まで考えあぐねたが、とりあえずの結論として示したい。他の問題ともども、さらに考えたい。

資料

赤川次郎『女社長に乾杯！』・遠藤周作『沈黙』・川端康成『雪国』・北杜夫『榆家の人々』・曾野綾子『太郎物語 高校編』・太宰治『人間失格』・立原正秋『冬の旅』・谷崎潤一郎『痴人の愛』・壺井栄『二十

四の瞳』・新田次郎『孤高の人』・堀辰雄「風立ちぬ」・三島由紀夫『金閣寺』・村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』・山本周五郎『さぶ』・山本有三『路傍の石』…以上CD・ROM版『新潮文庫の一〇〇冊』（用例に付された数字はCD・ROM版のページ）

参考文献

三上 章（一九五一・三）『現代語法序説』刀江書院（復刊（一九

七二・四）くろしお出版）

永野 賢（一九五二・二）『から』と『ので』とはどう違うか『国

語と国文学』第二十九巻第二号 pp3042（『伝達論にもとづく日本語文法の研究』東京堂（一九七〇・五）所収）

久野 暁（一九七三・六）『日本文法研究』大修館書店

張 麟声（一九八三・八）『のだから』について『日本語教育研究論纂』第一号（在中華人民共和国日本語研修センター紀

要） pp32-37

国広 哲弥（一九八四・一一）『のだ』の意義素見え書『東京大学

言語学論集84』

蓮沼 昭子（一九八五・七）『「ナラ」と「トスレバ」』『日本語教育』

第五十六号 pp65-78

ティノコ、アントニオ・ルイズ（一九八八・五）『「デハナク」の論理』

『言語学論叢』第六・七号 pp13-24（筑波大学）

吉田 茂晃（一九八八・三a）『ノダ形式の構造と表現効果』『国文学

論叢』第十五号 pp46-55 (神戸大学)

文の研究 上』pp221-245 ころしお出版

吉田 茂晃 (一九八八・三b) 「ノダ形式の連分的側面」『国文学研究

野田 春美 (一九九七・一〇) 『の(だ)』の機能』ころしお出版

ノート』第二十一号 pp41-51 (神戸大学)

井島 正博 (一九九八・二) 「形式名詞述語文の多層的分析」『成蹊大

田野村忠温 (一九九〇・一) 『現代日本語の文法——「のだ」の意味

井島 正博 (一九九八・二) 「形式名詞述語文の多層的分析」『成蹊大

と用法——和泉書院

名嶋 義直 (二〇〇〇・三) 「ノナラ・ナラに関する一考察」『言葉と

Sweetser, Eve E. (一九九〇) "From Eymology to Pragmatics: Metaphorical

文化』創刊号 pp143-162 (名古屋大学)

and Cultural Aspects of Semantic Structure" Cambridge

吉田 茂晃 (二〇〇〇・三) 「ノダの表現内容と語性について——ノ

University Press

ダ)は『説明の助動詞』か——『山辺道』第四十四号 pp17-31

小金丸 (野田) 春美 (一九九一・三) 『の(だ)はなん』の機能』『阪大

(天理大学)

日本語研究』第三号 pp45-58

藤城 浩子・宗意 幸子 (二〇〇〇・六) 「(ノ) ナラの意味と特徴」

有田 節子 (一九九一・三) 「日本語の条件表現と叙述の特定性とい

『三重大学日本語日本文学』第十一号 pp92-81

う概念についての一考察」『日本語・日本文化』第十七号

桑原 文代 (二〇〇三・四) 「説得の『のだから』——『から』と比較

pp97-112

し——『日本語教育』第百十七号 pp63-72

吉田 茂晃 (一九九一・三) 「書評 田野村忠温『現代日本語の文法

名嶋 義直 (二〇〇三・二) 「ノダカラの意味・機能——語用論的観

I——『のだ』意味と用法——『国語学』第百六十四集

点からの考察——『語用論研究』第五号 pp17-30

益岡 隆志 (一九九一・五) 『モダリティの文法』ころしお出版

中野 友理 (二〇〇五・一二) 「ナラとノナラ」『北海道大学留学生セ

野田 春美 (一九九二・三) 「複文における『の(だ)』の機能——『

ンター紀要』第九号 pp22-38

ではなく(ノ)』『の(だ)』と『のだから』『の(だ)』——『阪

有田 節子 (二〇〇七・五) 『日本語条件文と時制節性』ころしお出

大日本語研究』第四号 pp73-90

版

国広 哲弥 (一九九二・一〇) 『の(だ)』から『の(だ)』、『の(だ)』から『の(だ)』

鈴木 庸子 (二〇〇八・三) 「中国語母語話者における『のだから』

の共通性——カッケンブッシュ寛子他編『日本語研究と日

の誤用とその要因——KYコーパスのデータをもとに——』『甲

本語教育』名古屋大学出版会 pp17-34

南大学紀要 文学編』第百五十三号 pp21-33

野田 春美 (一九九五・五) 『のだから』の特異性』仁田義雄 編『複

蓮沼 昭子 (二〇〇八・三) 「日本語学習者の会話能力と『ノダカラ』

使用の実態—KYコーパスをデータに—『姫路獨協大学

外国語学部紀要』第二十一 pp177-195

井島 正博 (二〇一〇・三) 「ノダ文の機能と構造」『日本語論集』

第六号 pp75-117

井島 正博 (二〇一一・三) 「主節における非文末ノダ文の機能と構

造」『日本語論集』第七号 pp70-103

井島 正博 (二〇一二・一) 「文末ノダ文の構造と機能」『国語と国

文学』第八十九卷第十一号 pp101-113

安田 崇裕 (二〇一二・一二) 「従属節におけるノダの機能」『北海道

大学研究論集』第十二号 pp189-207

井島 正博 (二〇一三・三) 「人称表現としてのノダ文」『学芸国語国

文学』第四十五号 pp7-20

(いじま まさひろ 人文社会研究科 教授)